



気候

典型的な南海型気候であり、黒潮の影響も大きく、年間平均気温は約18度、降水量は2000mmを超え、高温・多雨である。台風の影響地としても知られ、夏季の風雨は人々の生活に影響を及ぼしてきた。

地形

足摺半島の中央部、周りを120m級の丘陵・台地に囲まれた、小規模な海岸平野に清水は位置する。海岸部は、入り組んだ地形が深い入り江を形成し、波風ともに穏やかで、古来、以南地域の良港として発展を遂げてきた。



植生

温暖な気候により、暖地性植物が生育する。清水地区の鹿島の叢林は、イヌマキやタブ、シイなどの大樹が生い茂り、市の天然記念物に指定されている。また海岸部を中心に群生するウバメガシは、かつての村の生活を支えた炭焼きの原料である。



地域記録集 土佐の村々2 高知県土佐清水市清水地区 清水村 〈自然と歴史〉



▲土佐清水市と清水地区の位置



▲清水地区と周辺地域

はじめに

四国最南端、足摺半島の中央部に清水はある。群青の海を眼前に臨み、深緑の山々を背に抱える穏やかな港町である。

古来、以南と呼ばれてきた幡多郡南部、特に海岸地域の人々の暮らしは、太平洋を流れる黒潮とともにあった。なかでも良港に恵まれた清水地区は、室町時代には海上交通、江戸時代以降は政治や経済の要地となり、海を舞台に壮大な歴史が展開された地域である。明治以後は、埋立てや開拓による市街地化が進んだことで、県内有数の港町として、さらなる繁栄を誇った。

しかし近年、経済構造の変化や過疎高齢化による人口減、津波への対策などにより、今また大きな変化のときを迎えようとしている。いまこそ清水地区の過去と現在を記録しなければならぬの思いから、本号では海との関わりを中心に、時代とともに移り変わる清水を紹介する。

鯨野郷

〜平安時代〜

クジラを連想する地域名

平安時代中期の書物『和名類聚抄』には、清水を含む周辺の地域が「鯨野郷」という名称で記されている。

「イサ」は鯨の古名で、現在でも足摺岬の伊佐に地名が伝わっている。この鯨野郷の範囲は、鎌倉時代以降、「以南」と表現された地域とはほぼ重なり、現在の土佐清水市と幡多郡大月町の南部の地域を指すとされる。



『和名類聚抄』にみえる幡多郡の5つの郷

以南村

〜鎌倉時代〜

一条家・金剛福寺と幡多荘

現在でも当地域を「イナン」と表現する時があるが、この表現は鎌倉時代中期以降、確認されるようになる。

建長二年（一二五〇）、前摂政九条道家が記した古文書の中に「以南村」と見えるのが最初である。道家から息子の一条実経に譲られた荘園の内に、幡多荘があり、幡多荘内の地域区分の一つとして「以南村」が登場する。

鎌倉後期、正安二年（一三〇〇）には、一条内実より、足摺の金剛福寺への寄進米六石が以南村に賦課されており、幡多荘内の他の地域と同様、一条家の荘園支配のもと、地域の有力寺院である金剛福寺とも関係を持つ地域として、以南村は存在していた。



元町にある蓮光寺は、鎌倉時代の開創と伝わる浄土宗の古刹。写真中央は、本尊の木造阿彌陀如来立像で、鎌倉後期の作と見られる。

シ水

〜南北朝時代〜

「シ水ノモト」

「シミズ」の地名が確認される最初は、建武二年（一三三五）の金剛福寺院主心慶の置文である。「シ水ノモト二段」の地が、金剛福寺での仏事の供田として、また同寺破損の際の修理田として記されている。南北朝時代の初めには、「シ水ノモト」に金剛福寺の支配を受ける土地があったことが知られる。



渡し場付近にある「清水之名泉」。江戸時代に編まれた『土佐州郡志』以来、この名泉が「シミズ」の由来と伝わる。

加久見氏と清水

〜室町・戦国時代〜

一条摂関家の土佐下向と加久見氏

加久見氏は、現在の土佐清水市加久見を本拠とした国人領主で、応仁の乱後、京都から土佐に下った前関白一条教房を支え、以南地方に勢力を張った雄族である。

加久見宗孝の土佐守任官は、一条教房の推挙によるものであり、また、宗孝の娘中納言局は教房と婚姻を結び、土佐一条氏初代となる房家を生んでいる。

加久見氏と清水城・蓮光寺

加久見氏は、加久見城を拠点に、清水・猿野・三崎に城を構え、清水・越中浜・大浜の海岸部を抑えて（以上、土佐清水市）、海浜集落を基盤に幡多西南地域に勢力を張った。

天文三年（一五三四）八月には、加久見氏一門の主導により、蓮光寺の梵鐘鑄造のための勧進が行われている。寺院の復興を通して、清水と関係を持つ加久見氏の姿が知られる。この時の勧進状には「幡多庄以南村志水」と地名が記される。



海浜集落を基盤に活躍した加久見氏は、「海の領主」として注目されている。

南海之津

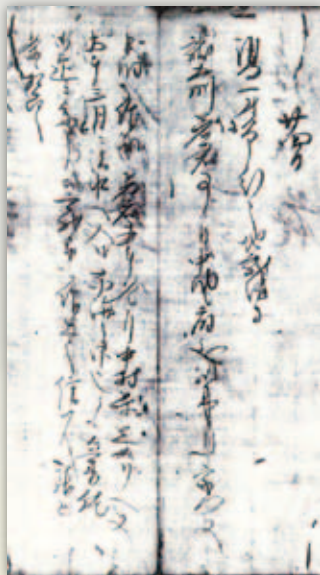
〜異国への窓〜

南海路の要港

室町後期から戦国時代にかけて、清水は京畿内と明国（中国）・南方とを結ぶ南海路の拠点港として、海を介した交通・交流の舞台となり活況を呈した。

往来の商客、南北の舟人 文明十二年（一四八〇）の蓮光寺建立勸進状には、本尊阿彌陀如来の奇特を記す中で、「海にのそみて往来の商客を利益し、風をわけて南北の舟人を送迎す」という文言がある。文明年間当時における清水港の繁栄を想像させる。

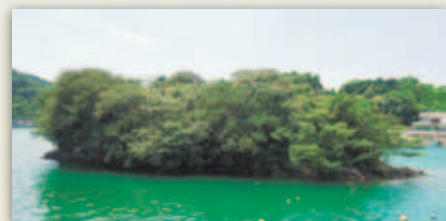
一、就土州若君事、自中納言局文到来、自家門又巨細被仰出、若君去年冬、自中村御所、足スリへ御入、当年三月二清水へ入御、南海之津也云々



『大乗院寺社雑事記』（国立公文書館蔵、重要文化財）文明16年7月24日条 清水が「南海之津」と記される

海外に知られた清水 十六世紀半ば、明国の使、鄭舜功が著した『日本一鑑』には、南海路の港が記録されている。清水は「礁」（水面下に隠れている岩、ハエのこと）が多い港で、「港内山河」鯨魚を産す」と記される。

異国船の記憶 長宗我部氏の盛衰を叙述した『土佐物語』には、清水港の広大なるを見て、元親が「異国の大船、数度入津せしも理なり」と述べたとある。江戸時代の文学作品に現れた異国船の記憶といえよう。



清水港の奥、浦尻に属す唐船島 唐船来航にちなんで名付けられたと伝わる

長宗我部地検帳にみる清水の風景

清水検地の概要

天正十五年（一五八七）から、長宗我部元親は土佐一国にわたる大規模な土地調査（検地）を実施した。清水では、同十七年十一月に検地が行われており、その検地台帳（清水村地検帳）が今に伝わっている。

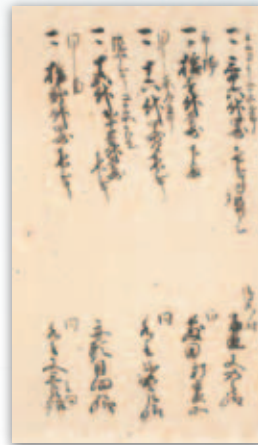
清水村地検帳によると、田畠・屋敷・畑など、検地された面積は八町三反余、その内、本田が六町七反余、出田が一町六反余であった。本田に占める割合では、長宗我部氏の直轄地が最も高く（下表参照）、「市場」「城カサキ」「賀島」などの要所が長宗我部氏の直轄地にされている。

名前が記される人物は、全部で三十八人おり、名本竹島弥三兵衛をはじめ、漁父・船頭・水主・番匠・小使などの名前が知られる（下表参照）。

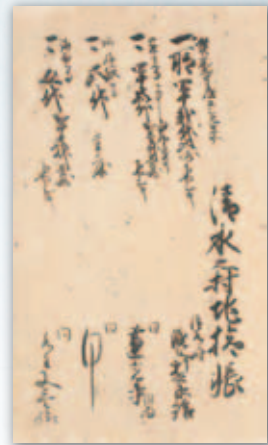
屋敷は、全部で二十八カ所が記録され、その内、十九カ所について居住者が記されている。



長宗我部地検帳（重要文化財）
原本の表紙と冊子の姿、土佐一国分368冊が伝わる



清水村地検帳の5～9筆目
船頭・水主・番匠がみえる



清水村地検帳の冒頭部分
1筆目に漁父新兵衛がみえる

ている。居住者として多く見えるのは、番匠と水主である。
寺社関係では、蓮光寺とその阿弥陀堂をはじめ、常楽寺・海雲寺・賀島大明神などがあり、賀島には「聖人」が住んでいた。

清水に生きる人々

清水は、室町後期から戦国時代にかけて、土佐一条氏・加久見氏のもと、南海路の海運に関わる拠点港として、また加久見氏の水運・水軍に関わる基地港として大いに発展した。長宗我部氏が清水に浦刀祢村役人的人物）を置き、清水を支配下に置いたのも、まさしくこの性格に注目したからである。

このような清水の性格を端的に表すのは、船頭・水主・番匠といった海運関係者と漁父の存在である。

漁父新兵衛は、字「向ヤシキ」に屋敷を持ち、長宗我部政権のもと、清水浦の浦刀祢に任じられていた（秦氏政事記）。長宗我部氏は「市場」を直轄地としていたが、それを管理していたのが新兵衛である。

また、船頭は日向と善兵衛の二人が知られる。この内、善兵衛は清水には土地を所持していないが、加久見氏の本拠、加久見村に八反余の土地を有しており、加久見氏との関係が注目される。善兵衛は加久見村地検帳に「清水衆」と記されるように、「衆」という集団的まとまりを持ちながら、加久見氏に従っていた。

水主は、又三郎・弥五郎など八人が知られる。水主は、船頭の指揮下に船を操り、航海を支える人々である。

番匠は、又五郎・孫七など九人が知られる。番匠とは船大工のことである。本田に占める土地の割合では、長宗我部氏の直轄地に次いで、番匠の給地が多く、また屋敷の居住者にも番匠が多く確認される。清水浦における盛んな船の建造・修繕の風景が想像される。

◆清水村地検帳にみえる清水地区のホノギ

清水村	常楽寺道、蓮光寺々中、阿弥陀堂、海雲寺、コムカイ、市場、浜ヤシキ、太門ヤシキ、小路ヤシキ、ヲトリ堂ヤシキ、向ヤシキ、風呂ノ本、ツツミ、マエタ、風呂ヤシキ、坊ノ上、中ツツミ、坊山、弓場ノ本、アカハケ、水クレハ、小屋ノ谷、野中、谷ダ、ワタイチ川、ミタンキレ、滝ノ下、キサカタ、トウミチ、チカラ御前、アカタウラ、ワタシ、賀島、賀島大明神、鷺ノ巣、清水ノモト、トト浜、清水コエ
清水浦	城カサキ、コシカキテン、貝塚

市場・太門・小路・ヲトリ堂（踊り堂カ）・風呂ヤシキなどのホノギ（小字名）からは、清水の都市的な姿が想像される。

◆清水地区の居住者ならびに清水地区の土地に権利関係を持つ者

名本	竹島弥三兵衛
漁父	新兵衛
船頭	日向、善兵衛
水主	又三郎、弥五郎、宗七郎、勘衛門、彦四郎、又太郎、源七、七郎三郎
番匠	又五郎、孫七、兵衛五郎、菊松、源一郎、久介、久助、勘太郎、源四郎
小使	源左衛門
加久見氏	賀久見左衛門大夫
加久見氏一族	蔵松龜大夫
加久見衆	中野官兵衛、御中間藤七、西松左兵衛、松本孫介
越漁父	松本九衛門

* 上記の他に、北代伊賀守・同市大夫ほか、6名の名前が確認できる。北代氏は長宗我部氏の家臣と思われるが、他6名については職掌・立場等は未詳。

◆本田に占める給地面積の合計と比率

長宗我部氏	1町7反13代2歩	25.7%
名分（名本）	9反 3代5歩	13.5%
漁父	1反16代5歩	1.9%
船頭	15代	0.4%
水主	3反45代	5.8%
番匠	1町5反20代3歩	22.9%
小使	20代4歩	0.6%
加久見氏	4反13代3歩	6.3%
加久見氏一族	20代	0.5%
加久見衆	8反30代	12.8%
越漁父	3反49代3歩	5.9%
蓮光寺	1反	1.4%

清水浦の性格

清水は、海運・水運あるいは水軍に関する船頭や水主とその活動を支える番匠たちの一大基地であり、海運集落としての性格を強く持っていた。漁村としての性格が色濃くなってくるのは、江戸時代に入ってからのことである。

清水浦漁業を盛んにする

「無双」の湊

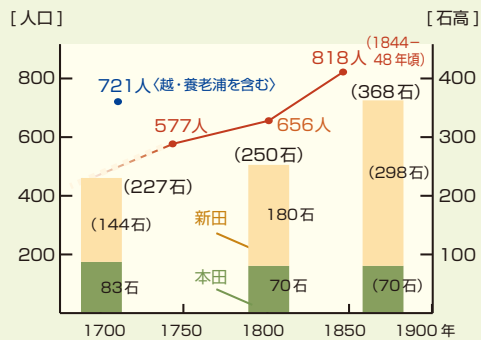
深い入り江に穏やかな海をたたえる天然の良港の清水浦。このめぐまれた自然条件のなかで、清水浦の江戸時代の歴史も形づくられた。

土佐藩を代表する国学者・谷真潮も「清水浦湊誠ニ無双なり」と評した。

地域の生業

清水浦は、江戸時代を通じて人口が五百〜八百人ほど、土佐藩では中規模の浦である。十八世紀には十艘ほどの漁船や廻船のほか、各種の漁網がある。漁業と流通が清水浦の主要な生業だった。

他方、平野の乏しい清水浦にも、本田・新田合わせて二百〜三百五十石ほどの田畑があった。江戸時代の絵図には、越浦の境や尾浦の付近に田畑が描き込まれている。清水地域には藩の留山などもあり、多様な生業が営まれていた。



江戸時代の清水浦(村)の人口と石高 ()内は推計値
本田は長宗我部地検帳に由来し、
新田はそれ以降新たに開発された土地のこと。

浦の役人

良港の清水浦には、分一役所や遠見番所など、藩の重要な機関が設置された。分一役所には藩の役人がつめ、津出しされる材木や浦の漁獲物から分一銀(関税)や口銀(漁業税)を徴収した。

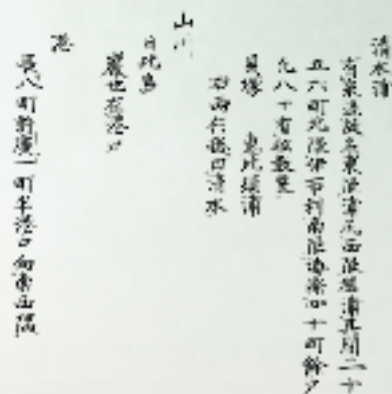
また浦では庄屋と老が中心となり、地域を自治的にまとめていた。清水浦の庄屋は代々浜田家が勤め、同家からは郷士も輩出される。

十七世紀末まで幡多郡に中村支藩が置かれていたが、清水浦は同藩の所領に含まれた。中村支藩においても浦・湊の要地として重要な位置づけを占めた。

浦の寺社

江戸時代中頃、土佐藩が招いた儒者の緒方宗哲が編纂した『土佐州郡志』には、三つの寺社が記録される。

本清水の小さい丘にある「蓮光寺」、鹿島にある「鹿島神社」、そして戎浦の「蝦子社」である。毎年九月九日の鹿島神社の大祭には、杜林が「鳴動」と記され、地域の信仰を集めた神社の霊験を伝える。



『土佐州郡志』の清水浦(部分)

黒潮の道

海に開かれた清水には、黒潮の道を通じて新しい技術が伝えられた。

十七世紀中頃、紀州印南浦(和歌山県南西部)の漁民たちが足摺沖の鰹の好漁場で操業を開始する。その始まりは、清水浦に隣接する越浦に拠点を置いた角屋甚太郎という人物だったという。

竿一本でつぎつぎと獲物を取りあげる豪壮な鰹一本釣りの漁法「鰹溜釣り法」はこの時に土佐に伝わった。また紀州で普及していた鰹節を煙でいぶして造る「燻乾法」も導入されている。

これら紀州からの技術導入により、足摺半島を含む土佐湾海域で鰹漁が本格化していくことになる。

清水七浦

豊かな鰹漁場を抱える足摺岬以西の七つの浦は、鰹漁と鰹節生産の基地となった。これらを「清水七浦」や「鼻前七浦」と呼ぶ。

清水浦にある分一役所は、時にこれらの浦々から口銀などを徴収することがあった。また清水七浦をまとめる大庄屋を清水浦の庄屋が勤めることもある。足摺岬以西の地域をつなぐ核の一つが清水浦だった。



清水七浦(○)と鰹漁場

紀州漁民の据浦

当初、土佐の鰹漁を担ったのは紀州の漁民たちであった。彼らは、毎年春に土佐を訪れ、漁期が終わる秋に国元へ戻った。足摺半島西岸の清水七浦には、紀州漁民の拠点となる「据浦」が設けられた。

だが、優れた技術と組織力を持つ紀州漁民の出漁によって、清水浦の人々の生業も制約されたという。他領に移り住む「走り者」がこの地域で多く見られるのもこの時期である。

戎町にひっそりとたたずむ紀州漁民の墓は、かつての据浦の歴史を今に伝えている。

鰹釣りの図(『土佐国職人絵歌合』
高知市立市民図書館若尾文庫所蔵)

戎町にある貞享2年(1685)銘の石仏、印南浦と太輔が建てた。

漂着の湊

清水浦には、慶長七年（一六〇二）のイスパニア船を皮切りに、琉球船や清朝船など、四艘の異国船が漂着した。その数は土佐藩の浦々で最も多い。黒潮がぶつかる足摺半島西岸で、大船の碇泊が可能だったことが要因の一つといえる。

元和年間の漂着では、イスパニア船が独断で出航したため小競り合いがおきた。異国船が放った大砲の煙で「三日湊くらみ申」したという。

他方、宝永年間の琉球船の漂着では、出航の離別時に詩歌も交換された。蓮光寺には清水漂着中に亡くなった琉球人の墓が残されており、往事の交流をしのぶことができる。



蓮光寺 琉球人の墓

清水浦へ漂着した異国船

年	西暦	船籍	漂着までの航路
慶長7年	1602	イスパニア船	ルソンよりメキシコへ向かう途中で漂着
元和2年	1616	イスパニア船	ルソンよりメキシコへ向かう途中で漂着
宝永2年	1705	琉球船	清朝へ進貢の後、福州より琉球へ帰国の途中、足摺沖で漂着
安政3年	1856	清朝船	海南島漁船、越浦で漂着後、清水浦へ入港

海防の湊

足摺半島の地理的条件から、清水浦は海防の機能も担った。

異国船を監視する遠見番所は、寛永十五年（一六三八）、島原の乱を受けて、幕府の命により土佐藩各地に築かれた。清水では、港口の遠見の鼻に十八世紀初め頃までに設置されている。

清水の遠見番所は、二坪ほどの小さな板敷きの物見小屋で、南から季節風が吹く三月から七月に地下人二名が番人として常駐した。ここからは東に白碇、西に沖ノ島までを見渡すことができた。裏の鞍掛山には狼煙をあげる火立場もあったという。

清水浦の漂流記

延享二年（一七四五）十二月、清水浦の小船が足摺岬の沖合で遭難した。船頭は清水浦の藤五右衛門、紀州領民を含む四名が、津浦から鯨の骨粕二百五十俵を積み込んで清水浦へ戻る途中だった。鯨の骨粕は、薩摩などで肥料として重宝されていた。

藤五右衛門ら一行は船上での飢えに耐え、はるか東方の八丈島で救助された。そして翌年八月末、江戸・紀州を経由して無事故郷に戻った。

この時の漂流記は、浦役人池則満が「八丈島漂流記」にまとめた。八丈島の生活や言葉だけでなく、記録の少ない清水浦の海運の様子も伝える貴重な史料である。



漂流する藤五右衛門の船（『土佐国群書類従』より）

大関「清水節」

江戸時代も半ばを過ぎ、土佐で活動する紀州漁民らが中心となり、新たな鰹節製法が考え出された。これは鰹節にあらかじめカビ付けし、海上輸送時の腐敗を防止したもので、土佐節をさらに保存と風味に優れた鰹節に作りかえた。

新たな土佐節は、藩内各地で生産されたが、なかでも清水七浦でつくられる「清水節」は優品として知られた。文政五年（一八二二）の「諸国鰹節番付表」でも全国の産地を押さえ、東方筆頭大関を占めた。また十三代藩主豊熙の巡見記でも、清水の鰹節は「最佳也」と賞された。鰹を煮る清水の水がその秘訣だと伝える記録も残されている。

やがて、この土佐生まれの製法は、黒潮の道に乗って安房・伊豆・薩摩などへと伝わることになる。



鰹節を磨く図（『日本山海名所図絵』より）

津波の記憶

宝永四年（一七〇七）の宝永大地震は、清水浦にも甚大な被害を与えた。『谷陵記』によると、津波が越浦への峠道を飛び越え、山間の家が僅かに残り、鹿島神社の社殿も流されたという。これにより清水浦の中心が「本清水」から現在の市街地付近へと移ったとも伝えられる。

また安政元年（一八五四）の南海地震でも町家の軒下まで水につかり、塩浜も津波が堤を越えて一面が海となった。清水以西の浦々では地盤沈下も確認されたという。

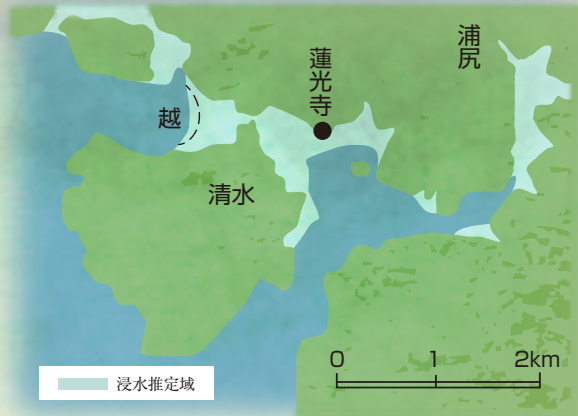
塩浜

安永九年（一七八〇）、清水浦の象潟に入浜式の塩浜が築かれた。海の干満を利用して塩を採り出す塩田である。

土佐藩は広い海岸線を持つものの、多雨なため製塩業に適さず、毎年二、三万石の塩を輸入していた。清水浦の塩浜は、この状態を改善するため、国学者で浦奉行の谷真潮が主導して築造した。

湊の入り江に長さ八十メートルほどの石垣を築き、約二ヘクタールに及ぶ塩浜が造られた。製塩技術は、先進地阿波から技術者を招いて導入した。天保十四年（一八四三）には、製塩高が七百四十五石余りと、土佐藩の総生産量の一割ほどに達している。

塩浜の築造には、この地域に新たな産業を創出するねらいもあった。当初清水浦の庄屋が塩浜築造の発議を行っているのもその表れといえるだろう。



宝永地震の浸水推定図『歴史探訪 南海地震の碑を訪ねて』（毎日新聞支局刊）所収の図を一部改変

描かれた江戸時代の清水浦

19世紀前後の清水浦の絵図——海・町並み・田畑・山林・漁場など、近代の地図とは異なる江戸時代の清水浦の生活空間が描き出されている。

この時期の清水浦は、屋敷105軒、人口656人、郷士・医師のほか、他国者として紀州人、阿波塩焚ら7人がいたと土佐藩士寺田三八の巡見記に記録される。絵図がこれらの人々の日常を写し出す。

① 集落の町並み

蓮光寺がある本清水や貝塚には家々が立ち並ぶ。本清水から越浦に向かう道に大きく描かれるのは、庄屋浜田氏の屋敷だろう。

② 塩浜とその石垣

塩浜には役所など茅葺小屋8軒ほどがあった。石垣で浦の往来も便利になったが、1854年の安政地震では津波の被害も出た。

③ 分一役所と高札場

戎浦には分一役所と高札場が描かれる。豊漁の神を祭る戎神社の手前には船着き場がある。湊口にある戎浦は、浦の行政と漁業の拠点でもあった。

④ 渡し場

戎浦の対岸、中浜浦への峠道の境には渡し場があった。浦奉行谷真潮も清水から中浜に向かう途中、この渡し場を使ったが、海が荒れ、半日ほど出船が遅れている。渡し場を出る小船が人々の往来を支えていた。

⑤ 尾浦の駄場

湊口の西、尾浦には畑が切り開かれ、戎浦の人々が耕作に通っていたという。平野の少ない清水浦の貴重な耕作地の一つである。

幡多郡清水浦の図(高知県立歴史民俗資料館所蔵)



鼻前の豪商・山城屋

長らく紀州漁民たちの勢力が強かった足摺半島でも、江戸時代後半には地元商人が力を付けてくる。なかでも鼻前の豪商として富を蓄え、地域に産業を興したのが、清水浦の隣、中浜に本拠を置いた山城屋である。

山城屋が製造する鯉節は、優品「春日節」の名で知られ、自前の大型廻船で江戸・大坂へと運ばれた。また鼻前の浦々を商圏に、薪や炭・木材など、地元の産物を手広く扱った。その富は、他人の土地を踏まざるとも、山城屋の土地だけで隣浦へ往来できるほどだったという。

この時期に形づくられる浦々の地域のつながりは、近代以降の清松村などへと引き継がれる。

幕末の清水浦

幕末の巨大な社会変動の流れは、清水にも波紋を残す。その一つが異国船を迎える砲台である。

十八世紀末以降、日本近海に頻繁にあらわれる異国船に対応して、土佐藩の要所に砲台が築かれた。清水にも、文化五年(一八〇八)、天保十四年(一八四三)、安政元年(一八五四)に砲台が作られた。幕末の砲台は、中村郷士で勤王党西部首領格でもあった樋口真吉が、幡多郡の浦々に築造したもの一つである。

砲術家としても知られる樋口真吉は、清水の湊口を囲むように牧浜など三ヶ所に大規模な新式砲台を設置した。

ジョン万次郎こと、中浜万次郎たちが慌ただしく清水を駆け抜けたのもちょうどこの時期である。



樋口真吉『砲台図篇』より
(四万十市立郷土資料館所蔵)

明治・大正時代

以南の中心地へ

明治以降の清水は、以南地域の中心都市として発展した。漁業と交通の主力が和船から動力船へと代わるなかで、水深が深く大型船も停泊可能な良港としての自然条件が優位に働いたことが大きい。人とモノが集まるなかで、清水の歴史や景観も大きく変貌することになる。

捕鯨の町

明治・大正の清水は、それまでの鰹漁業などのほかに、捕鯨基地としても賑わった。明治三十年代、長崎の捕鯨業者が清水にノルウェー式捕鯨の本拠地を置いたのがその始まりである。最盛期には、東洋捕鯨株式会社など五つほどの捕鯨会社の解剖所・採油場が立ち並び、町には技術者のノルウェー人の姿も見られた。大正期には、漁業用の製氷工場なども造られ、近代的な漁港としての基盤が築かれていく。



上田亀之助の市街地造成
『土佐清水市史』上巻所載図より作成

清松村と清水町

近代の地方制度の展開のなかで、清水は行政面でも以南地域の中核となっていく。明治二十一年（一八八八）の町村制が公布されると、足摺半島西岸を行政区域とする清松村が発足し、村役場が清水の貝塚に置かれた。



明治40年頃の鍛冶屋駄場

また大正十三年（一九一四）には、清松村を母体に清水町が結成されている。鼻前七浦など、江戸時代以来の地域のつながりがこの地域の地方行政の母体となっていた。

上田亀之助の市街地造成

清水が行政・経済の中心地となるなかで、狭隘な市街地が地域の課題として浮上した。この問題に私財を投じて取り組んだのが香南市夜須町出身の上田亀之助である。

上田亀之助は、町の中央にあった小高い丘の鍛冶屋駄場を切り取り、その土砂で沼地となっていた塩田を埋め立てた。これにより新たに約一万二千坪の土地が生み出された。この新しい市街地には、銀行や劇場・商店など近代的な施設が建ち並び、移住者も相次いだ。亀之助の事業は、その後の清水の発展の基礎となった。



上田亀之助像（本町）

昭和戦前・戦後期

昭和の戦争と清水

昭和の戦争は、清水にも少なからぬ影響を与えた。徴用や勤労動員により市民生活が戦時体制へ強固に組み込まれたほか、配給制による物資欠乏のなかで、清水市街地と農村部の間では、着物や魚と農作物の物々交換が頻繁に行われた。

戦争末期、昭和二十年（一九四五）三月頃からは連合軍の空襲による被害も受けた。また、越浜には海軍の特攻基地の跡も残されている。

変貌する景観

戦後、清水の景観を大きく変貌させたのが、昭和二十九年（一九五四）から始まる都市計画事業である。

第一次事業では、もり山・天神山・旭町の山を切り取り、その土砂で越浜を埋め立てた。これに合わせ、道路の拡張や中央公園の建設も行われた。

また、昭和四十一年（一九六六）から着手された第二次事業においても、水道山など三つの山を切り崩し、さらなる市街地の拡張が図られている。

清水の歴史は、明治・大正・昭和と景観をめまぐるしく造りかえながら展開した。



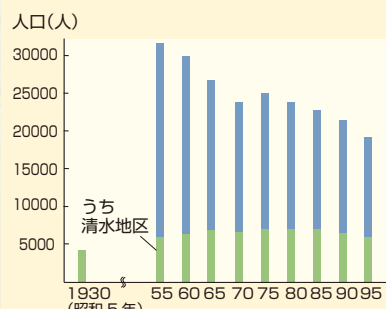
清水商店街のにぎわい
（昭和32年2月）
町人もこの半世紀余りで変貌した

人口推移と地域の課題

清水に地域の経済・行政機能が集中するなかで、人口は増加を続けた。

昭和初年、四千人強を数えた清水地区の人口は、その後順調に増え続け、戦後の昭和三十五年（一九六〇）には六千人にまで達している。市街地の拡張による宅地の増加や漁業や商業の成長が地区の人口増加を支えた。同二十九年（一九五四）には、土佐清水市も発足した。

しかし、長きにわたり増加を続けた清水の人口も、高度経済成長以後、停滞・減少に転じる。全国規模で進む産地間競争や少子高齢化など、さまざまな地域の課題を抱えるなかで、宗田節や清水鯖といった地域ブランドの創出など、新しい動きが生み出されている。



土佐清水市の人口推移（1930～95年）
＊清水地区は越地区を含む。



越地区あしすり港岸壁
（昭和57年12月）
フェリーむろと号の就航を祝って

地図と写真で見る清水



① 鹿島神社



② 蓮光寺



③ 恵美須神社

交通

<高知市から約135km>

- ◎高知自動車道高知ICから四万十町中央ICまで約1時間。国道56号線、国道321号線を車で約2時間
- ◎土佐くろしお鉄道中村駅から西南交通バスで1時間20分



④ 市街地(中央町)



昭和30年頃の清水地区

『高知県郷土観光アルバム』より(高知大学総合情報センター<図書館>中央館所蔵)



⑤ 現在の清水地区(平成26年)

お世話になった人々

【機関・団体】

高知県立歴史民俗資料館
高知市立市民図書館
高知大学総合情報センター
国立公文書館
四万十市立郷土資料館
土佐清水市役所
土佐清水市教育委員会
土佐清水市郷土史同好会
土佐清水市文化財調査会
土佐清水市立市民図書館
蓮光寺

【個人】

岩井拓史
植杉 豊
榊原俊文
芝岡恵三
谷孝二郎
谷本良信
田村公利
富田無事生
中村春利
宮崎 茂
山崎重信
山下晃弘
山田隆子
山元良也
(敬称略・五十音順)

編集後記



昨年度から刊行を始め
た地域記録集の第一号
は、山の村・長岡郡立川
をとりあげた。記録集を
知った立川出身者からは、都
会に行った子や孫に送りたい
という話も聞かれた。偉人や
著名人はいなくとも、人が住
むところには厳然と歴史があ
る、実感をもって地域の歴史
を振り返ってもらいたいとい
う私たちの思いは、様々な形
で受けとめられたようで、先
ずは心安んじたところである。
さて、山をみたならば、次は
海をみなくてはならない。
幡多郡清水村は、大洋とと
もに生きてきた村である。時
に世界史ともかわりながら
あった清水の千年を振り返っ
て、時代の変化に巧みにかつ
大胆に対応する地域の歴史が
みえてきた。殊に、江戸時代
に始まる干拓や、近代の埋め
立てによる大地の改変のス
ケールの大きさには驚かされ
る。その清水は、経済構造の
変化への対応、地震津波対策
など、今また変革の時を迎え
ているかのようである。
(企画員 筒井聡史)

幡多郡 清水村 (自然と歴史)

地域記録集 土佐の村々2 高知県土佐清水市清水地区

発行 平成二十六年(二〇一四)三月三十一日
編集 公益財団法人 土佐山内家宝物資料館
執筆 差し込み 渡部 淳(館長)

印刷 株式会社 飛鳥
一・八頁 筒井聡史(企画員)
二・三頁 横山和弘(企画課長)
四・七頁 古賀康士(学芸員)